



命の大切さ

～ある猫のはなし～

ある日、私の勤める施設の玄関に、小さな段ボールが置かれていました。なんだろうと思い、中をのぞいてみると、乾いた小さなパンといっしょに、猫が眠るように入っていたのです。

その猫は、毛並みがきれいで、家で飼われていたと容易に想像することができました。前日から放置されていたのか、さわってみると体温が低く、息をしているのかもわからないほど浅い息をしていました。

その施設は、子どもたちが通う施設です。放課後になったら、子どもたちの元気な声が、建物中に響きます。幸い、まだ小学校から子どもたちが帰って来る時刻ではなく、多感な子どもたちの目にふれることはありませんでした。

いたいけな猫を、飼い主は、どのような思いでその施設の玄関においたのでしょうか。飼えなくなったので、施設に通う子どもたちに世話をしてほしいと思ったのかもわかりません。何か他の事情で、泣く泣くその猫を置き去りにしたのかもわかりません。でも、どんな事情があったとしても、「小さな命」を見捨ててしまうことは、いかがなものかと思われます。

昨今、新聞やテレビなどでも、生まれたばかりの赤ちゃんが置き去りにされたという、心が切なくなる痛ましい事件が報じられています。猫の話と同じように何か事情があったのかもわかりませんが、他に手段は考えられなかったのでしょうか。

また、傷害や殺人事件など、人の命が軽んじられているような事件が、毎日のように報道されています。このような状況に「ああ、またか」と心が慣れてしまうことは、実はとても怖いことだと思います。

猫の命であれ、人の命であれ、命の重みには変わりはありません。自然を愛し、動物を愛する心が、人を愛する心につながり、命を大切にすることが、多くの人であれば、人がよりよく生きていける社会の実現につながっていくのではないのでしょうか。

